

ほっぺの宇宙

ふとんに溶けるかのように眠る娘

小さなほっぺに頬をよせてみる

ああ、なんとやわらかく、あたたかいことか

瞳を閉じれば、そこから果てしない宇宙が広がっている

小さなほっぺの中には、すべてがあった

どこまで歩いてもたどりつけなかった家

どこかでなくしたまま見つけられなかった宝物

どんなに渴いても沸くことのなかった泉

いくら服を重ねても暖まることのなかった体

自らを偽ってでもなれなかった存在

すべてが、まるく赤いほっぺの宇宙のなかにあった

ああ、なんてあたたかく、やさしいのだ

小さないのちを抱きながら

わたしは大きく深い宇宙に抱かれていた

探してきたもの、求めてきたものは

小さきものをただ、愛おしく抱く

わたしのこの腕のなかにあったのだ

今日もほほをふくらませて娘が笑う